椿說弓張月

前編 一

へ13
3908
1

門へ13
3908
1

鎮西八郎為朝外傳 椿說弓張月前編

曲亭主人著述
葛飾北齋繪畫

群鳳堂
群玉堂梓

帙各六冊
凡五篇卅卷

爲朝外傳弓張月題詞

鎗刀劍戟三千隊。鐵馬金戈一萬重。斬將
入堅人莫敵。應教冠者顯英雄。

射柳穿楊藝術奇。保元敵將竟難支。駈兵
入陣山川暗。斬寇歸營日色低。

錦袍金甲黃驃馬。玉帶銀盔素線縅。腰下
雕弓頻挿箭。手中鐵利鋒刀。

日出扶桑二丈高。金蘭何處匿生逃。男兒
未遂平生志。磨礪頑拳問帶刀。

愁多不忍醉時足想極還尋靜處行誰遣
同衾又分手不知行路本無情
一語相歡利斷金配軍到今識君心八郎
廟食東海嶼猶羨當年德澤深
血戰當年報主忠斬堅入陣幾千重英雄
功績何處在回首沈吟孤嶋中
衝突艫艨勢若潮一時軍卒盡流漂可憐
裂女嶋中骨猶帶寃聲湧怒濤
孤嶋猶存戰血紅當年豪傑總成空客舩
于此重嗟問惆悵西風夕照中
仰首乾坤一笑頻相逢夢裡指行津鴈鳴
雲霽幽魂散山驛依然物色新
驍勇爲公武略帝鎮西士卒望旌旗不勞
長箭英雄服千載功勳播遠夷
殺氣南來戰胆寒征雲冉冉蔽空山英雄
預定驅戎策談笑斯須破敵關
琉軍戰慄和軍營滿谷連山遍哭聲兵刃
相迎一夜殺平明流血浸空城

單騎南來一千里將軍端的建功謨虬人
無阻相迎奠筵食壺漿滿道塗
士卒長驅帶羽鵰爲公向奠將夫驍洲民
仰帝如湯禹一統球陽聞本朝
豈
文化乙丑年冬十一月飯台曲亭主人書
於著作堂

鎮西八郎爲朝外傳卷之二前編目録

第一回
信西博覽好辯非
第二回
迷路止狼戰
第三回
山雄喪首放主
第四回
重季死軀全珠
第五回
白縫風流操女兵
老猴登塔辱主
第六回
爲朝勇敢伏九洲
病鶴出籠答恩
第七回
伴舍勸猴酒

第六回
紀平治獻計說地理

第七回
紀平治逐船飛鐵丸

第八回
寶莊嚴院御曹司示強弓

第九回
野風陣沒開活路

第十回
爲朝單騎走江州

第十一回
楊梅瀑布御書の事
右山溫泉武藤太責舊主

第十二回
琴彈神社武藤太逢美
觀音寺村白縫女殺仇

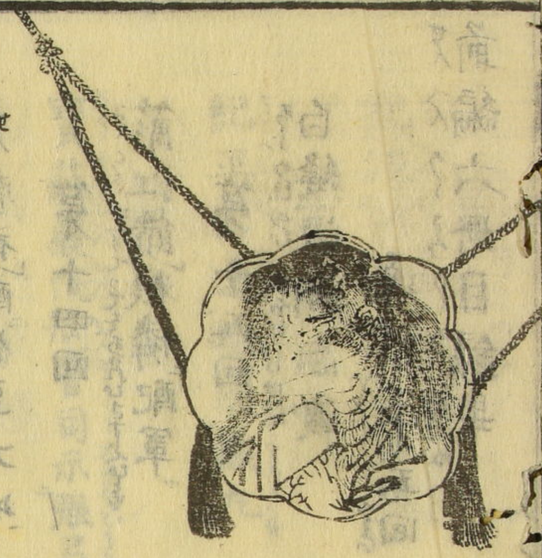
第十三回
爲朝被配伊豆大嶋

第十四回
鄙江饋粮憐配軍

第十五回
白縫汲潮志渡
通計一十五回

前編六冊目錄畢

後編六冊
新院攀生魔界
一冊出



崇徳院

白縫姫

八町礫紀平治を夫

なのくれ袖も
ぬるゝまであふぬの
ハナちる川の流るゝ

八代姫

やつろよのぐさ洗ふ
水もみくる
くのうら波そゝぐ
うのけふ

籠江少女
虹陽寧王女

源爲朝

ためとものさぶらひ

おとをとぐむ

ひさごの

あまよ

うかぶ

かをそ

みるものくに

この書保元の猛將八郎爲朝の事蹟を
もとゝして憑空結構の筆よ成れ者理外の幻境ホ探ぶとゝく可あり。
爲朝琉球へ渡りのひとゝよ説原何の書よ出るをもとゞ。
神社考よ云爲朝八丈嶌より鬼界ホ行琉球よ一旦る。今よ至り諸嶌
祠を建るく島神よりとゝよ寺嶋ホ和漢三才圖會よ又云爲朝大嶋を
遁出るく琉球國ホ到て魑魅を驅るく
土人ホ生せり。爲朝遂去のち球人
しるく姓を安くるとゝ洲民その徳を感
琉球へ渡の説をり。彼説をるものいまゞ何よ据よを詳よせず今軍記
の異説吉老の傳話を合せ考日狂言綺語をもくこれを猥る。
事ハその時代を考ふとゝも文ハその間山林の口氣を脱まてこれ婦幼其
目よ解一易くらんが爲なり。画も又右に
好古の君子幸よ怪こゝろふなれ。

鎮西八郎爲朝外傳 椿說弓張月前篇卷之一

東都 曲亭主人編次

信西博覽難非を好
爲朝稟性射法よ達

第一回

清和天皇七世の皇孫鎮守府將軍陸奥守源義家朝臣の嫡孫
六條判官爲義の八男冠者爲朝とゝ
七尺豹の目猿の臂。膂力人よ勝ふるく
凝煉なり。さるに天性弓馬の妙奥を極むべきくもあり。生れ
ふるくより肘馬よ四寸伸るく。矢束を引よ世よ超つ初きようその
見識卓くるく。鞍の兄弟も此を恐るとゝ
時よ近衛院の仁和元年。爲朝廿十三才よなりひるく形狀ハ尋常の壯

夫をも家をも失ひて、久後いうそのみをうけきたまひ
けんの心ちどもく、父爲義も生平よき名を揚ぐ。驚嘆
の上皇譲ひ奉りたまひぬ。保安四年正月九日、宝算二十一にて御位を第一の
宮顯仁王に傳へ奉りたまふ。治兼元年六月九日、追號ありて、崇徳院と申す。
皇子重仁親王、これ果てたまひぬれど、天下の政ひ大小となく、院鳥羽上皇
の御心のままなり。されど天下の政ひ大小となく、院鳥羽上皇より制度一のひつぎの保
延五年五月十日、美福門院の御腹に皇子誕生ありしぞ。上皇
猶ほ悦びおぼしめすばかりに春宮よりそひ奉りたまへ。永治二年十二月七日、本年僅に
戈そ三つ。天子の位を即きたまふべきせ。先帝崇徳院をば新院とぞ申すなる。これより上
皇のおぼしめすやうひより出でたまひぬ。新院深く徳も推辞ひたまひぬ。只ほこうの底よりさ
く恨みおぼしめしたる事よ。父子の中も昵くこそあるべきを、況や公の好き御位を去りたまへば
さこそと推量まなざせたまふ。代謝世のならひなれば、早晩新院のほうえんをも
ありけるにや。公卿あまた宇治左大臣頼長公少納言入道信西などと僅か
五六輩よきを武士ふたり六條判官爲義父子のこそをり〳〵まゐりて慰め申すなる。
ある日少納言信西新院の御所よりまゐりて、韓非子といふ書を讀よしを
そのたまへりしぞ。爲義朝臣も聽聞のやうにて折〳〵若殿ばらへ。
かかるのをもおくまもおくべきぞとも存じ給へ。子どもの年ま
だ幼くおはせしかば、ただ勇ましいさぎよからんことをのみ
ぞ思ひ給へけん。御許を蒙りて召具しもてまゐりぬ。
すぢきに誘ひ仰せられば爲朝はことわりなり。御階の下よりつい居て
從者あまたこのごろ打拂ひ彼御所へまゐりぬ。
説ところをぞひろひ。抑少納言藤原通憲入道信西は山井二位永頼
御八世の後胤越後守季綱が孫。一説は實範
みち〳〵南家の儒流とうとべる高階氏。養子とありしをば儒官吉野

信西
侍読
鳥羽殿

この人博学宏才ふ〳〵渚道ふ達もその妻が雅仁王後白河院是の也乳母おう
れ是八上皇ゝ二あきこりのこと愛おぼ〳〵朝政をさへ預り行ひのふよ
その職よ堪うとハえあ〳〵ふりんそ〳〵申籌の法を用ひく賞を軽〳〵罰
を重く〳〵動されバ親疎よつけく〳〵次新よ私あり〳〵極よもほく〳〵人の怨残
惹りかく〳〵朝恩よ湾こりのあ是ことハうかる公ふあり久ん上皇新院御子
のはし中ほ〳〵ふびなりのひく後も〳〵えを白河殿新院のほへまおりひり新院
御所やゝ潜よ源平の武士よ御局をつけ
よ集ふ〳〵ふのおへまん所ふ
くまのせーうこの日ゝ果〳〵信西よ文武の古實を守せの小序まう國往
古の強弓ハ誰なうんと問ふ人ハ信西が稟申う本朝その人よこそ〳〵ら
まそこ〳〵も吉備臣尾越看人宿祢。この二人よ不如いうんと〳〵答をまれバ。又今
の世ふこくいと仰さる安藝云守清盛兵庫頭頼政いづれもえんあうりの
よいよ〳〵せーを意朝ふれ信ゝ意ま声を發〳〵呵〳〵と冷笑へう信西信
とうへうこの不敬なりあ是ハ誰世〳〵ん〳〵と回答ふいーく信西ハ文座をもつく御階のす
十一法もかれバ御免ハ蒙ふねど今日の講釋を好なう彼もせそ
潜ふ百倡〳〵手ふのと回答ふいーく信西ハ文座をもつく御階のす
立ようこそ〳〵鳥朝の面をもも瞻うつこの小冠者重疊中〳〵異相なり手
そいよ〳〵十五ふる兎さ〳〵きかいと仰ふるひ〳〵ふ仰ふのありて
玉座ちうきをも憚ら〳〵愚老を嘲弄多へるといと苦〳〵問〳〵をふ鳥朝ハ
驚きてく氣久もおく世の人の言をなく〳〵通憲入道ハ博士よおのせと親疎と
つきく〳〵次新よ私ありといへりしう果〳〵今の世れうりを清盛頼

政さと宣ふ傍いさゝかもものゝ憖飯の給を
あみ入ず清盛ハ武もあり文もあり幸ひて朝恩と浴もるゝこかくの人ハ
あが仏なるものよ仰られど愚父あさくの爲義ハ十四年の間勅を蒙りて美濃前
司義綱を攻亡し又十八箇の荘園を賜ハりて攻
上るよし聞えしかバ兵向ひ防けと仰下されしかバ俄須のこゝの軍勢も
忽ち六七百騎あまり栗栖山と地向ひ数千騎の大衆を追ひくゝひとゝて皆参
よりてハ年老たるいとの母人と爲義朝なんどゝそ矢ひていと乞ふきて者
ありとの爲義朝臣ハとれをはさく。神ハ正直の頭に宿り給ふ王座ちかゝれハ心ハ退るよし及もこの
ゝ出さんとくかゝこと退けゝとおほせども
折しも左府頼長公もとゝり給ひしこの問答をうちきゝ笑ひを含ゝ品
ゝひる射よ信西勝をきめやをれ八郎愚老が親疎よつゑ断よ私あり
ゝゝ誰がいひつる頼政ハ近曽紫震殿の上よ夜ゝあらハれる怪鳥
を射ゝその名芳ゝゝ又清盛ハ左衛門佐ゝりしとき内裏よ怪鳥ゝの
ゝを轟ゝ射ゝ落せゝよこの鳥清盛の袖よ飛入るをのゝくこれをハ
せ給ふ嵐なり則南の塁の竹を伐らせ竹の筒よ嵐を籠ゝ清水寺
の岳よ埋ゝゝこれを一竹塚といふこのゝいゝくもをりつるとゝ人ゝの感し
あへりそゝハゝきのふふのゝゝ
うむゝ攻さゝも自滅すべき叔父の義綱を討武道よ疎き南都の大衆
を追ひ返ゝる類よあゝさゝ又義朝よ於ゝいまゝ武勇の誉をやうゞ
いよゝ近ゝも
猶まも射ゝ嵐をバ猫も捕るなり足下ハ文章のゝよことを賢ゝへ
それ弓矢のゝゆハ弥ゝ争ゝあり所詮誰被

をとりく。百万の強敵を退んるがごとく。あるべくもそえいろも
とく。信西ばく〳〵呆果おそれ〳〵回答もせざりしが忽地〳〵ともち笑ひ
ハ横よ裂うとて。父ハいかゞあらんと。凡藝術ハ賤の日を距事を踰切差
琢磨の功を積ざるべからず。縦ひその才強禄のうちより習
伯益五歳みづて火を学る賢愚ゟ拙ハ年をりく論もべからず。いふあれ
矢束早も仰せ〳〵射させる人大悲の智恵の矢なりとも輙く。とう〳〵えせ
まねをべしとて信西もをじめ松ハいとく懲さんとそひつゝ鳥朝さいふ
強しる氣なきゆゑ。憤慨ふかく。的弓の上まで鳥羽院の住給
ふ後瀧口めされぬ。ある時三人五寸の的を給りく。これ等二の
矢をも挟く。誰ゟ仕ふつるぞ。
ものゝ
ものりつゝ回答て式成則負とて二人の瀧口弓矢を携へ階のそと
よりまいりく。信西こゝ。如此〳〵のまねをせよとの小冠者ゟ一矢つゝ父と云
この二人の瀧口ハ原白河院の武者所おもふ

對のいとくそのりのを將くと退出のべと仰るとのときさるも爲義
朝臣が默然こくと居るかこと凜々しく爲朝既に十二歳
さのまゝ幼きといふもあとまでりとの期に及ひくそのゝを果さぬ敵
ひろんと宣へかるうへにもかくもこれ矢面に立んの幸甚一但そのの
陣に臨こくと後をふまるふも劣まり彼一人が惜ぬ足くと悔くへ源
對し式成則負ぬ命惜双の弓こりさ
矢をこりもまうまつる命惜地に待べ。これ性命をりく足下に許を我
又よくその矢を取るくんよ。何をうのりのぞといふ信西今笑くあ房
よくく矢を取くべこの首ふうとも進まべ。信西が仏門の徒こ只今
汝が射殺さるとも先後あらじと報ひいでと歎くを。爲朝が耳
もふけて廣庭に走りひり矢どろをさうくと立うする彼式成則
老功のそのなれいこの光景をうくそ
うのく兵器を弄さんあるべ人を射殺さぜくと樂に志りその武烈丸
悪さほ行ひも勝れり。何とせんと躊躇を信西端ちうく立出くとく
うくと催促ぬ二人も今ぬせんまじ。豫くく二の矢おくべくと定めくれ
まじ矢二條をくま挟こくと立むう。當座の人いまよ汗を極り。
今の爲朝が命八日新まうまつ露よりもる消やもうべくと思れ
ぬる。くくと式成弓矢つひ滿月のごくとまり。矢声をうけくと切くと發つを
爲朝雌ぼよ丁と取る。神もあくせぜ則負がてのう矢胸下ちうく飛まる
を見るも雄ぼよ受とあうこう。式成ぬ損せ朽をくまよ縦射ころもすぞふ
至ぬぼこともやいこの度ぬ取られじと。あ人育くくとまり。まぜ透間を窺

式成則員 鳥朝を射る

くようろ引漂と發つ矢を一條ハ袍の袖よ縫留させ。又一條ハ取るよ間もあられば。口なりく林と食留一ツ心地よ鏃を噛砕きろその疾と陽炎よ登るごのおとく。雷電の閃よかくく。人間技とも覚えねば。これをつくりの醉るうとく。嘆賞あまりて声ごく得揚まを爲朝ハ取る矢をも左右へ掻遣捨いてその法師首もつくんといひもあへず。石階の上よ跳上り。信西よ摑ごかくらんとするを父の爲義押隔てく直よ撲地と衝落一。武士の家よ生れる者の偶矢前を避ぬうろ敢めづくーとまでも足ふまざるまでの者の秘をも顧ず。鄙陋の挙動こそ礼なれ一。こハ漫しといひ懲一めふぞ。頼長公こそあハれ一。やよ爲我いくなよ叱りそ。信西も又弘るとも忘べきよあらぬぞ。むくーぬうれ童ハのも日れ出沒よつきくその遠近をひうよ。孔子もこれを辞一がうりしぞ。今通憲入道ご爲朝を伏一ろぎるもこれよ、おのく退出ぬ。

へと。未まもはうまで草ふも附ず。彼是實ひうり新院ハ日来やうろうり退きあうく左府頼長と潜よ相語ひひ一が御簾の間うり爲朝ご光景を御覧じくく。彼ハ也の用あもよろべきりのくとおぼーろれご稱ひひ一汝よ爲義も劣ざる面目をほどこ一。父子こもつれくく退き去ぬ。この時うりそ爲朝の名ハ世よ高くなりける。さまごの信西ハ爲義親子をいくく恨こ。志ごくく讒言ひ階んとこーろるう終よ保元の兵乱よ及びく。新院うりそのくも爲義を召ま。爲義已一こを辺ごと六人の子ごもをねくく。疎身方よ参りしよ。その軍利あしくく。新院ハ讃岐國よ山ふ遷されまくりこころ通憲入道信西ハ爲義父子を憎むり深くめや。まこと久しき死刑なやもとその長公の屍を掘生くく首を刎させ爲義父子以下。新院の近身方よ

ふり。武士を搦捕せ。こまその首を梟さらし惡報あやとのりふん彼信西が中納言信頼卿と權をあらそひしより。いく祖もなく平治の逆乱起りすの劍首よかるといふ天文をよくし都を落田原の奥なる大道寺の坑よ竄く。生あらん土中よ瘞れしを敵兵探り索く掘出。その首を取てく六條河原よ梟てさらし。宣なるうなる信西が己を博士ありて人を拒罰を重くして衆の恨を顧ざりし因果覿面こそとこのころの人ども罵てるるとぞ。

第二回

路よ迷ふ狼の戦を止め
舎よ伴ふ猴酒を勸む

この日爲義朝臣が舘よくりゆきて爲朝をちく招き出ふいる貌姑射の山の尊紀よも怕れを織素の手よありあらん長者をも敬ま。

ちがひ。肩を聳せしハ何のゆゑぞ夫孝ハ身を立るよあり一朝の辱ひその身を辱しく。式成則負が翁面よろうの牧人の行ひ齊し兵法もの將驕しきハうなりと敗るとよくり。智あるりのハ爭ハず能なるりのハ誇ふまを、いふる。今日の動止ふ忠よやいらん。ふ考へやいらん向後をよく慎りんと教訓しるハ爲朝畏くく。父の命さうるやなれど彼通憲入道信西ハ賢者ぶ人ハ。その籠遇を妬く當今近清院よ昵近しまれが他人ハとまれかくまるま彼ハ世のゆゑを導りく。新院の伝くハ疎うべよ。さらまくくく親くまりつふるゆ。城の西よあいぼ潜よその光景をうんまあせ怪しくもやふるのあんまり爲朝頭くこれを殺ふ在ふ。今日言を設く者奴を懲よせ。ふたび白河殿新院の御所へハ足踏もさせずくそひりまの是。いく信もて私語ひまる。

志ハ一あり。〳〵爲義又宣ふやう。いふ〳〵より官よ怕れよこ
てゝのみあり。信西ハ君寵よ誇るのみあり。彼り〳〵ふ〳〵つゞ黨を憎まゞつゞ家
彼がこすの舌よ亡さるべし。此月明日筑紫のつく〳〵下りそこの禍を避よ俱〳〵ゆふ
な旨なれゞ音耗なまべ〳〵まそのて〳〵蔭の用意をもぜ〳〵へと宣ひされゞ爲
朝ハ父の氣久あ〳〵きをうえ〳〵ゆくびて言ゃまを久〳〵のちまて詰朝乳母よ須
藤九郎重季只一人を召俱〳〵都の空もまこ果ぬ月も西へと入らけのて
曉の星を戴ひて立出つ。日數經〳〵豊後國ぞ〳〵
来りし〳〵とこの國ぞ名〳〵る尾張権守季遠ハ由緣あるくまれゞはゞこゝ
人をこのゝ〳〵えだやし〳〵立ゟりまひ〳〵ふ季遠易〳〵引く養ふ
かゞせ〳〵祖よとふ三年の月日稍〳〵爲朝既よ十五歳よ学ばん〳〵
〳〵智勇抜群ぉり〳〵ゞ經傳兵書ゟゞひを恥ら。又折ふ〳〵弓矢を携
ゝ木綿山麓の西よあり。又一名同名あり。よ狩ゟしまる。有一日只ゟり山ふり〳〵まけ〳〵り
路よまゞ〳〵行ども〳〵舊の山路よ出ゟらまで。只又まばゆくきの樹の仁よ狼
のこ二頭ありて鹿の宍を爭ひ嚙あふ。爲朝まぞ〳〵停立つ。つゞ〳〵ゟ〳〵れゞ今
塗れ勝らまず劣らまぞえ〳〵ゞ。
の世のくこゞ紙ゞ笑の中よ刃をかく〳〵利を
高記を猜こ。食祿のわ記をも爭ゞ父子も讐敵のごひをまゞ〳〵又長鎗を
削るゟ。この狼よ異ゐゞまで。今この獸のたゝひハ我よ觀念を勸るのかゝ
ゞもち。ゟ〳〵ゞ助るせんとゐゝこもち。まこと對ひ〳〵宣ふ。汝おいこれ
勇き神あり。今食を爭ひ〳〵互よ痩つき傷むのあゞれ労せまじく
両おが〳〵獲人も容易〳〵夫食ハ別よ求るゟまあ〳〵。生と〳〵活ゟの一
ゞび命をゟりおハ来るよをあゟりあんと。ゟ〳〵退けよ〳〵いをゟう。ゟの末を挿

為朝幽谷ゟ狼の皷を打ち看

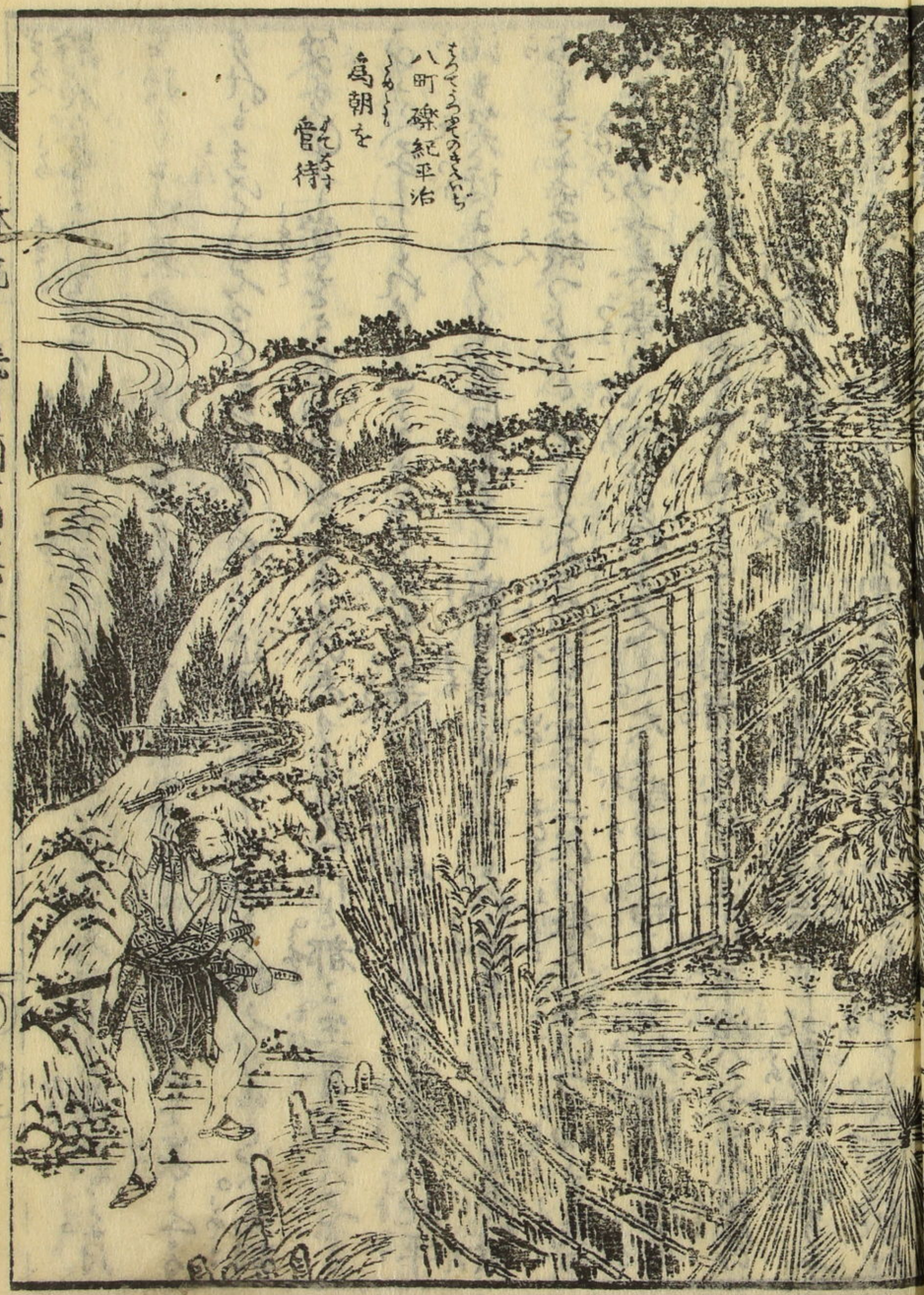
入ㇾ来ㇾ一尺ㇾ余ㇾ跳ㇾ去ㇾ又ㇾ入ㇾ来ㇾ左右ㇾ撲地ㇾ顛ㇾ
臥ㇾ又ㇾ跳ㇾ起ㇾ鬩ㇾ戦ㇾ数ㇾ合ㇾ鮮血ㇾ迸ㇾ地ㇾ流ㇾ忽地睡ㇾ去ㇾ
ㇾ近ㇾ前ㇾ且ㇾ驚且ㇾ喜ㇾ此ㇾ狼ㇾ為朝ㇾ熟ㇾ打ㇾ瞻ㇾ
頭ㇾ低ㇾ恩ㇾ謝ㇾ状ㇾ如ㇾ感伏ㇾ状ㇾ和睦ㇾ如ㇾ
有ㇾ人ㇾ奸雄ㇾ有ㇾ此ㇾ狼ㇾ比ㇾ今ㇾ此ㇾ老ㇾ親ㇾ彼ㇾ未ㇾ起ㇾ義ㇾ
信ㇾ有ㇾ如ㇾ此ㇾ憎ㇾ可ㇾ去ㇾ状ㇾ宥ㇾ項ㇾ抜ㇾ矢ㇾ狼ㇾ
尾ㇾ掉ㇾ耳ㇾ低ㇾ押ㇾ気色ㇾ
ㇾ去ㇾ郷導ㇾ為朝ㇾ
狼小孩ㇾ
ㇾ走ㇾ入ㇾ物ㇾ怕ㇾ
人ㇾ一箇ㇾ芒ㇾ
頭巾ㇾ被ㇾ
刀ㇾ
弓矢ㇾ
弓杖ㇾ
礼儀ㇾ
司ㇾ
りの
浪人ㇾ
元琉球國の人なり
く。肥後の菊池ㇾ
一生ㇾ

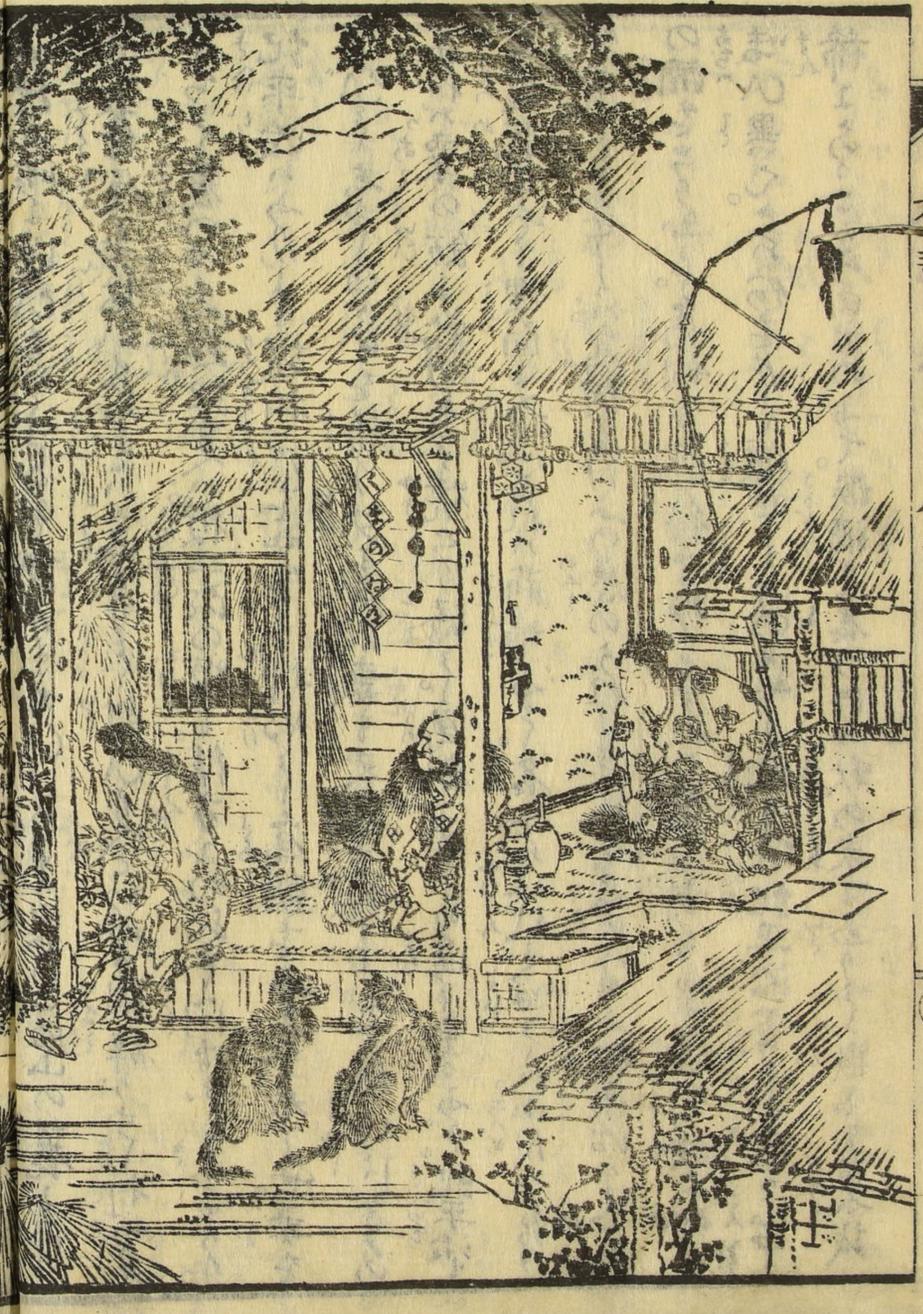
脚半ㇾ掛ㇾ腰ㇾ
山ㇾ猟夫ㇾ
彼男ㇾ為朝ㇾ
近習ㇾ
猟夫ㇾ
漂流ㇾ
祖父ㇾ
便ㇾ
業ㇾ

よう矢劔戦を用ひも以て磐をりく狙撃ふ百発百中のま煉あり。凡八町の内よ寇を定めく撃ちく疾紀鳥勇士武といへども打殺さぎるふるなし。こをりくく人口順よ渾名しくそれ一今かく村落よありといへども。恥書雲の志なきまーもあらまじ。よりて君が文武の道よ富くく。もろくく人を化しめ。ゆくく身賤一それの身えまおもるよりまでく。尊き容を洋一をりく一ふ僥倖ふなうこれまんるのいうんとをいへりる。

爲朝ゆまのひくさていこの狼どもが怕れくまもそるざりく一ふ紀平治があをもくなりうん。それふ彼が磔よ処あるの者をべく回答しく路よ迷ひくるの狼のまなどまぐく。もうりうふ紀平治に顧嘆賞一君が徳既よ禽獣よ及ぶ。いとく有がくも賢くおいまんと

よ後日路よ迷ひまうぐ。さこそ餓りまし芽屋を飯ひまうぞふ立ようく。稗ひまうぐのくを語りゆまれば。妻も又夫よ有一くこ納信しきのあれふ栗の飯よ鮎のもく焼とり添く。爲朝よまうめ進ぢまるあそ紀平治も草鞋脱まてく裡面よ入り。これふ前婦ゆくく名をふ八代とはくれ此月をもりへくとやせーふ爲朝まけふの恵のうれきよしをぞえのふ紀平治ふ又一雅の酒をとり出く。爲朝を管待まうまれば。号を喫のふ菖蒲酒よ似ち味ひ異しこふのをとりく醸せーりのもやと問ふふ紀平治答く。是を山中稀よあるこころのりのまて猴酒と名づけふ秋の末よ至りく猴ふ菓城


八町礫紀平治
鳥朝を
曽待



貯人が看よ許をのこり集ゝ古木の虚巌の凹なるところなどよく掃めもくよ月
を招くその菓悉く潰おのづゝ酒のごとくなりてあれも山を家とする
ほどもなく近習又出て汲ゝ持ゝりいとう烏期
なのひゝ営をうち山中おさまるのありと伝れと都よ生育れいつそる
ゆさくみゝこれゝこさすいつもいそがしく争かゝる管待ありきと宜へば紀平
治も笑ほよゝりゝ。あほきゝ勧め進ゝせゝこれ高星ゝるゆそあれ彼
股を投ありまへ妻の八代いこれをゝゝ。大よ驚るき怕ゝを紀平治うち笑
く縁田を拘ゝるふそ。中ゝやゝこと汲安堵ゝりかゝゝ紀平治ふゝゝび舊の
処よ帰ゝまく。蕉火ありてふし乳母子須藤九郎重季ハ主君のへり肇
烏朝ハ重季をつれゝ紀平治ゝ彼此を索ぬ。中この処へまりゝこのそ。
厚き志をよろこゝこえ主の倶ゝゝ立ゝるよ彼狼ハなほその後方
ふゝゝゝ来ゝ。遅し遣れゝも烏朝の別
子舎のほとりを去てくなれば。烏朝も又こゝを哀こ一頭をゞ山雄と
名づけ又一頭をゞ野風と呼びゝゝさるゞゝ畜犬のごくゝそありる。

第三回

八郎冠者烏朝へゝゝびゝ八町礫紀平治太夫よ面あいせゝうゝふゝこれを

山雄　眷
重季　軀

ほくよ〳〵と偖〳〵きまゝよ世をうぢむざ滅忠の徒こそ有けれ。かゝ〳〵鳥朝そ
ある日朝まだき紀よりも弓矢を携乍山雄と呼べる一頭の猴を牽て来る。木綿山
雄此猴のへ須藤重季主の袖をひき〳〵それ〳〵前夜夢見もあしく足
も後も何となく胸うち騒ぎ〳〵心持穏あらず頻〳〵かゝるよの山猴を生捕
うへといひもをはてもしらぬ鳥朝うち笑ひ〳〵夢の五臓の労よ成けりとて。
かゝる折譜んの婦人のうへよあるべし汝公を安〳〵てよく留まらせよと
宮人の重季又禀やういふまでもなく人のくも事ふ臨まへ懼よといひ〳〵さればと止て
のべ〳〵あるべき重季をも召倶〳〵まだ〳〵もの寒まだと仰ぐ出ぬ人の重季よろこんで猿
火よ路をてらし主の倶〳〵主従其の次を走り来り。足よ信せて山をくだりけ
なる紀平治う家ふ立より〳〵彼をも伴ひ〳〵て音のひまへ八代を
出〳〵まだ湯を進ぜ夫紀平治いとの暁よ山へ〳〵出ぬされど生〳〵ずり経
もあよぬよ追鳶のうへ。山の半腹よりて追つ紀のうんといふまでいそ急けて。
主従其の次を走り来り。足よ信せて山をくだりけまだよいでく夜も
あけぬ紀へいゆくさ暗〳〵と遥よ紀平治をこえて。あまりよ疾走
て疲労のひ〳〵ゆり〳〵る褌の下よ立より。主従株よ尻をうけて明
そのうをまちうよは〳〵と明睦をうよは〳〵と明睦をまちうよは山顔睡をうよは〳〵と明睦
もの〳〵彼山雄一声高く吼主の行勝のたゝ〳〵を衝て子」よりれい鳥朝
も重季もおどろきそく〳〵四方をこえうろ〳〵と眼よ遮ほものもなし。
こゝ山雄ぶ戯ゝまとおぼ〳〵。又睡りのふよ復いく〳〵吼う〳〵囁す
行くべき気色なれば鳥朝倩と商〳〵。鹿狼い神〳〵しいへども畜
ぐ〳〵といふを宣なる。この畜生ごが睡る間を窺ひく咬人とする

て。あゝいまいまいま

山椎首を
喪そ
蝮蛇を
噬

雲間をうち瞻仰ぐに蛇數百丰を紆ふときは刃の中ゟかなたさま縁
あり。龍宮を盗まんとあれば。その珠を取らん爲よまづ雷公を遣りて震す
ようや。そのまこの蟒蛇ゟは珠あらべし。重季試ゟ殺さんとよと仰まれば畏り
つと回答ふ。彼蟒蛇の吭めがけて再び刀を突立つ。これを裂んと
さるゟ雨ハ盆を覆すごとく降なり。雷の鳴ゟまも〳〵爲朝へも
雷公の隨かるゟもあらば射よと弓ゟ箭をひざまづきそらんよて引ゟ其処
退きくおかへる。須藤ハ西こゑ濡つ。かゝる雷公をもゟもせを既
ゟ尾のあるうちは〳〵裂くこれどとれっとそゟおもなし。珠ハ頭のうち
やあらんとく。刀をうるほし。頸のはを刺く腮の下を探りこゝろ骨の
間ゟ物こそあれもゟ出なんとうれしとて引出さんとさる折しも四方晦瞑
とそ。一朶の黒雲須藤が上を掩ひ累り。一声の霹靂天地も動くばかり

ゟ鳴落ちを爲朝よりけく漂と殺つ夫少しまごゝろなりしゟ忽地
ゟ兩止雲もさりく。旭東の岸ゟ昇ぼり。爲朝ハ重季ごゟいと心ぐ
なくく。暗くも待ぞ走りよりこゝろまふよ哀むべし重季ハ脳砕肉壊
ゟ全身黒く黧く。肢體そつきこゝろ所もあれどとりてる刀さ放さず。尤
ゟハ血ゟ塗ゟ一顆の珠を握り持くゝ出るゟ雷公にこよう昇りく
とこゝろ。十圍ゟもある楠を斧ゟく割くゝ。梢より根の際まで二
片ゟ割裂くありしごと。爲朝ハそれゟ眼もそゟめらんごと。只管重季ゟ横死を
哀ゟこゝろれ血氣の勇ゟ涙て。求く危きゟ臨を両度ゟ免ぬ。前ゟハ慎
ゟく山雄を殺せ。今又須藤を喪へり。縦百朋の珠なりとも一人の家隷
ゟ換べきや。ゟさゟ彼ハこの手未憂ゟ冊おくく信せのみれハ弓ゟ征をも
ゟくゝ。ゟりもなくゝ。爲えのあーとく嘆くる。愛ゟく死ん祥し

木綿山ユ雷公
重季を撃

一。さいし又日来いかくぞう勇者そ。ゑねよその弟雷公よ撃るゝよりへいも。
よくその珠を全そ。彼薗相如が忠みも勝まりさてよゝまき。故をもつうな
と後悔ありく。公卿みよゝこゝろもつ。
く。やゝく彼珠をとりて又ふよ晃く
浩然よ前面の崖道よりいく〳〵濁まく。まるりのあり。誰そとそのへ日比
八町礫の紀平治より彼も仙曹司よりこえくれが忙〳〵走り来〳〵頂芳が
雷光。山雄蟒蛇の光糸をうく〳〵大。驚記。まづその故を問ふもれば。
爲朝ハ懐忠と〳〵涙を含と一五一十をおこうるゝあそ。紀平治いよ〳〵
弘るく〳〵ふく重季ゝ外を衣こ。又山雄を最惜つ。かく〳〵楠の根を
掘寄く重季ゝ屍を埋めく。さて仰をう標ませとりふ
爲朝まつく大なるニッの石を。いと程なく持来るゝ墓碑ニ〳〵

亡魂生天脱苦ま樂と念ずつ。紀平治そもよ山を下りのかよ細き渓
川を隔〳〵むひの峯よりさ〳〵安そ
飛んとされどもそのかを只管羽〳〵煩悶るまそかうそを。爲朝
遙よそまへしく彼鳥の足あ糸なゝそ。その緒
のよ〳〵の枝ふまつりく。飛もぞるふそ
へそれゞ〳〵礫をりく。打おと〳〵りんとい
め礫〳〵これを打ば。命立地よ絶多
なり〳〵。重季ま供養よ放生會まるをこゝろ
〳〵丁と射のよ落ハ忽地枝をそ
なくも花あゝまそ紀平治ハこの光景をこく着竹よま繰つき。藤蔓
ふ携つ。こゝろ〳〵渓底よ至り彼鶴をうき抱き。舊の岨方よ〳〵ち

うくりこいつゝの鶴いく羽を損ひ一と云ゝ飛さりくべきやうも
なあくまでは追ひくく足あとさゝうなる金の鏃を著くこの鏃の枝まつ
うくく引とゞめられつゝ彼一矢より射切のひゝうへ轅くく枝を放さてうまび
おゝよその鏃のそゝとこゝえて鶴のほうくく落散まるそのを云ゝよ黄
金の牌おくくへべこれをも拾ひとりてゝ彼牌を又せまゝくもくそ。
康平六年三月甲酉源朝臣義家放馬と彫つけられいつも驚きくく
宜つゝ。むうゝ奥州前九年の戦よゝ遠祖頼義父子駿け通徒を
誅戮一ゝくをりくふくこのゝを歎きのゝ負任宗任退治の後討
とるところの兵どもゝ耳を刕ゝ洛ゝのゝ六條坊門の北なる西の洞院
のほとりゝ埋ゝくゝ上よ一宇の堂を建立一ゝのくゝ今の耳納堂これも。
このゝ義家朝臣も彼地ふくゝ古者追福のくゝ駿の鶴よ黄金の牌
を著くゝ放一ゝのゝ。康平六年より云ゝ
茲久壽元年 く九十八年
なるゝゝいく奇一ゝこゝ鶴足ふ牌を著一ゝれくゝ憂ゝとも忘ざれハそゝかく
西海の果まくも飛まくくゝ乾坤ふ徜徉せ一ゝ偶そのゝ鏃松が枝ゝまつ
くりゝハ向の雷ゝ驚きくゝこの過をおくくゝめゝれりゝもくて過りなべ。
鶴ハ遂ゝ死ゝさを曾祖義家朝臣の神霊これをなゝ救ゝ
救ゝせのふりのなるくゝ。一下とびかゝとゝ又一とびいうれ一ゝくゝ。縁故を説
のゝハ紀平治も奇異の名ひをなゝ一。ふくゝ鶴を扛抱くゝ烏朝を館まで
送りまゝせ。ゝてそゝ家よゝりゝる。さくゝ烏朝ハ彼鶴をふくゝ勲
ゝ。姫ふ養ひろゝ一まづくゝ飼をふへ水をよゝうゝまいまゝ幾日もあよゝほ
く健みゝのりぬ皃よりハ先烏朝ハ彼日又ゝ行む子舎ふくりのゝとゝせゝくゝ。

独りそゞろ一頭の狼野風とよぐるが尾をうち掉。端ちかう来りしが。
何とおく哀れよおぼーく。くろの山雄が死るやごとも。くよりのいふがごとくなえ
ぬ野風にこれを慰もあへざ。頭を低垂涙さめ〳〵ぐさ〳〵。ふう〳〵愁ふる事更
なり。この光景をこれふも重季ぐるみの〳〵痛〳〵〳〵。その夜僧を
むく〳〵経を讀せ。かの男と山雄が為よなが〳〵追善の仏事を修行去ぬ
まり。

椿説弓張月前篇巻之一　畢